
ありすぶるーの空

えくるう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ありすぶるーの空

【Nコード】

N7197B

【作者名】

えくるう

【あらすじ】

海辺で拾った小さな猫に、ありすは、“リジェ”と名前をつけた。16歳のありすと、クラスメイトのヒナタ、一匹の猫を巡る、ちょっぴり切ない恋のお話。

第1話

その角を右に折れ
ひたすらに坂道を登れば
小さな白い教会がある。

その教会から見下ろされる形で立ち並ぶ
住宅街のうちのひとつに
ありすの家があった。

レンガ塀に囲まれた洒落た造りの家で
花を愛する母親の手によって
庭には季節ごとに様々な花が咲き乱れ
門柱を伝う蔓薔薇のビッドレッドが
晴れた日には美草の芝生に美しく映え
訪れた人の目を愉しませてくれた。

ありすは小学校卒業と同時に
この町へとやってきた。
これといって特別なものはなにもない
小さな町だったけれど

時折風に乗り運ばれる潮の香りは
ありすに海が近いことを教えてくれ

自転車に乗って一人で
その海を探しに秘密の冒険に出たあの日から
ありすはこの町がとても好きになった。

その海でありすは
小さな仔猫を拾った。

夕風に全ての時が止まったかのように
暮れ泥みはじめたあの日の海。

真昼にも出ていた月が
身体を起こすようにして淡く銀の光を放ち始め
やがて訪れる闇を前にして
その分身を海へと投じては
ゆらゆらと頼りなく水面を漂っていた。

ふと、ありすは 波打ち際に
小さな丸い毛糸の塊が
波に弄ばれるように
身を任せようとしているのを見つけたのだ。

おそらくその日、晴れていなければ
沈む陽は其処に影を作らずにいただろう。

月はそれを照らし出しはしなかっただろう。

ありすが波打ち際へと駆け寄り

その毛糸玉が実は仔猫だと知った時

海へと確かにジュ・・・と音を立て
夕陽が溶け落ちるのを見届けるように
再びに吹き始めた風は
少し冷たさと強さを増して

伸び始めたありすの髪に
まるで引き戻れと云わんばかりに
執拗に纏わりついていたことを

ありすが思い出したのは
もつとずっと 後のこと。

薄汚れたその猫は瀕死の状態で
何日もなにも口にしていないのか
骨と皮だけになった腹はしかし
ひくひくと小さく動いては
ありすに「生きているよ」と訴え

懸命に振り絞るように

喉元から小さく漏れた息が
「にゃおん・・・」と憐れな仔猫の声を
ありすの耳へと届けたのだった。

それが リジエ。

小さな仔猫がありすの元へ
初めてやってきた瞬間だった。

第2話

リジエは、幸い一命を取りとめ
日が経つにつれ、その愛くるしい仕草が
ありすの心を捉えるようになった。

お皿に入れたミルクに
顔をうずめるようにして飲むリジエは
まだ上手に飲めないのか
何度もケホケホと咳き込んで
泪をぼろりと零した眸で
ありすを真顔で見つめたりする。

誰かが既に小さなリジエに
トイレの扉を済ませていたようで
ありすが部屋の片隅に用意した場所に
よじ登るようにして這い上がり
ちょこんと座っては神妙に
やはり真顔でありすを見つめたりする。

そのあまりの愛らしさに
ありすは、リジエに夢中になった。

リジエは、初めこそ

ありすの家の住人を警戒するかのように
窺うような眸で小さく縮こまっていたが

やがて、ありすやありすの両親や

少しやんちゃそうな弟も

自分をとても可愛がってくれることに気づいたのか
少しずつ奔放で無邪気な様を見せ始め

仔猫のリジェは、まるで小さな子犬のように
部屋中を駆け回り

ありすやありすの弟の足元にじゃれついてみせ
興奮のあまり加減を忘れ、

ありすの膝小僧に小さなひっかき傷を作ったり

母親のお気に入りクのクッションの刺繍を
ボロボロにしてしまっ
て
がっかりさせたりもしたものの

ありすの家には、

リジェ一匹分の陽だまりが
確かに運ばれ

温かなものが家の彼方此方を
ゆっくりと満たし始めたことを

ありすは目覚めて
カーテンを勢い良くあけた　ある朝に
ふっと感じたのだった。

ある日リジェが、突然姿を消したことがある。

ありすが名前を呼びながら

リジェの姿を求め家中を探しても

リジェの可愛い甘えた鳴き声が

部屋の何処から聴こえることはなく

途方に暮れたありすが

ふとピアノのある東の部屋から

庭へと目を遣ったその時

蔓薔薇の這う門柱の上に座り

拾われた海の方角を

じっと見つめているリジェの姿を見つけたのだ。

それはありすに声をかけることを

躊躇わせるほどのリジェの横顔であり

その日を境にしてリジェは時折

家の中から姿を消しては門柱へと座り

いつまでもいつまでも

何かを探しているような眸で

海の方を見つめるようになった。

そんなリジエの姿に
ありすはリジエを
海へと連れていくことを思いつき

自転車の前カゴに小さなクッションを入れ
そこに小さなリジエを座らせると
勢い良く坂道を下り 海へと向かった。

潮風が髪を頬を、撫でる暇もなく通り過ぎていく。

深まる秋は、夏の間
痛いほど肌を突き刺した日差しを
いつのまにか円やかに変えていて

柔らかに微笑む陽だまりは
ありすに心地良いという感情を運んできたが

やがてもうすぐ晩秋の風が、
夏の日差しの代役を務めるように
突き刺すようなあの痛みを、
ありすの頬に届けだすことだろう。

リジエはカゴの中で小さく蹲り

目まぐるしく自分を追い越していく景色を
じっと見つめている。

ありすはリジェが怖がらないように
時々声をかけてやりながら
どんと坂道を下った。

潮の香りがいっそう強くなり、
やがて視界が開け
そこに海が見え始めた時

リジェは体を起こして首を伸ばし
まっすぐにその海を見つめ

にゃお・・・んと憐れなあの日を
再びにありすの耳へと届けたのだった。

第3話

リジェは酷く波に怯え
決して波打ち際に近づこうとしなかった。

ありすに抱かれながら
小刻みに身体を震わせて
じつと海を見続けた。

震えがずっと止まらないことに気づいたありすが
もしかしてリジェは相当に
海が怖いのではないかと思い、
優しくリジェに声をかけ
家に帰ろうと海に背を向けたその時、

リジェはそれに激しく抵抗し
ありすへと威嚇の声をあげたのだ。

驚いたありすが強引に
リジェを押さえ込もうとしたその時
リジェはありすの腕に爪を立て
あっ・・・と思ったありすに
確かに 確かに 次には
彼女の眸に向けて、その爪を向けたのだ。

寸でのところで、ありすがそれを躲さなければ
彼女の頬についた細い線は
間違いなく右の眸を傷つけていたことだろう。

「痛い！」

悲鳴と同時に

ありすの腕からこぼれ落ちるように

砂へと落ちたリジエは

ありすを振り返ることなく、ただ海へと向かい

彫刻のようにじっと 微動だにせず

寄せては返す波を いつまでも見つめ続けた。

闇があたりを少しずつ包み始め

波の音だけが規則的にありすの耳に運ばれるほかは

一切の音という音を断ち切ったかのように

不気味なほどの静寂が襲い来る。

ありすは何度もリジエに帰りを促したのだが

リジエはありすの言葉などまるで耳に入っていないようで

それでも抱き上げようとすれば

激しく威嚇をして、ありすを寄せ付けようとせず

そのくせ、ありすがわざとリジエを置き去りにして

海を立ち去ろうとすれば

にゃお・・・ん にゃお・・・んと

憐れな声で ひたすらにありすを引き止めるのだった。

ありすは、ほとほと途方に暮れてしまい

暗闇と空腹とで泣き出したい気持ちになった。

家を出て行ったまま、帰ってこないありすを心配して
父親が迎えに来てくれなかったら
ありすは恐らくいつまでも
海を後にすることができなかったことだろう。

すっかり冷え切った身体を温めるように
父親が自販機で買ってくれた
温かな缶コーヒーを掌で包み込むように持ち
一口、二口と啜るにつれ
ようやく人心地ついた助手席で
ありすは改めてリジェを見つめた。

後部座席。リジェは背を向けていた。

母親の手作りの
まあるい苺の飾りが2つついた
ティッシュボックスケースに凭れかかるようにして。

すっかり陽の落ちた町。
家々の灯りがぼつぼつと灯り始め
オレンジ色の街灯がぼんやりと傘をつくり
細かな虫がその傘を
奪い合うように飛び交っている。

車は坂道をゆつくりと登っていく。

海は少しずつ遠くなり
いつか建物の陰にすっぽりと隠れ
見えなくなった。

それでもリジエは
見えない海へと向かい
いつまでも視線を逸らすことなく
背を向けてじっと座っている。

「お父さんも、引っ搔かれちゃったね。」

運転する父親の左腕に

3本の線が、細く紅く滲んでいる。

車に乗せようと強引に

父親がリジエを抱き上げた際

リジエが彼に向け放った一撃だ。

「おまえの頬の傷も、リジエかい？」

ありすの右頬にもくつきりと斜めに細く
紅い筋が走っていた。

街灯のオレンジ色が
ゆっくりとぼやけていくのを感じていた。

あの日、リジエは波に弄ばれる
小さな毛糸玉のようだった。

ほんの僅か時間が違えば
ありすはリジエを
恐らくは見つけ出すことができなかっただろう。

あの海で出逢ったリジエ。
小さなリジエ。

ありすの帰りをいつでも俟って
嬉しそうに足元に擦り寄っては、
温かく迎えてくれるリジエ。

柔らかなそのミステイオフホワイトの毛と
ネイビーグリーンの悪戯な眸で
ありすの顔を覗きこんでは
甘えたように にゃおんと啼く
可愛い 可愛い リジェ。

急にありすの心を
耐え難き寂寥が襲った。

ありすは缶コーヒーを握り締め
声を上げ 激しく泣いた。

それは多分
小さなリジェと 小さなありすの間にある
目に見えない確かな何かを

ありすが初めて感じ取った
悲しい瞬間だったのだろう。

第4話

それから時々リジェは海へと行きたがり
ありすの自転車の前カゴに座り込んで
数時間そこから動かずに
ありすを困らせた。

あの日以来、ありすにとってあの海は
確かに小さな傷となり

思い出すたびに、頬に受けた
リジェの激しい一撃と
エメラルドの冷たい眸が
ありすの胸を突き刺すように
何度も繰り返し浮かんでくる。

ありすはどんなにリジェが強請っても
二度と海へ連れては行かなかった。

そしてありす自身もいつしかその海を
避けるようになった。

リジェは暫くは執拗に自転車の前カゴに座り
ありすへと向かい激しく泣いては

ありすの心を悩ませたが

諦めたのか、それとも海を忘れたのか
やがて海への執着はなくなり
愛らしくちよっぴり我俣でそして奔放な
いつもの可愛いリジエへと戻り
ありすを心からほっとさせた。

ただ、時々リジエが数時間
家からも家の周りからも消えることがあった。

「リジエも大人になるのだから
テリトリーも広げていかなくちやね。」

ありすの両親はそう言って
リジエの数時間の外出には
なんの心配も要らないよと言うのだが

長く家を空けたリジエが
戻ってきて、ありすの腕に抱かれたその時

必ずリジエの身体から
潮の香りがすることに
ありすは強い不安を覚えるのだった。

もしかして リジエは
捨てられたあの海を

一人で訪れているのではないだろうか。

ありすはそんな想像を試してみる。

しかしあの途方もなく長い坂道を
小さなリジエがたった一人で下り
海へと向かうなどということは、
考えられることではなかった。

近所のボス猫に苛められては
にやお・んと怯えて啼きながら
慌ててありすの膝へと戻ってくる
臆病なリジエが。

それでも と、ありすは考える。

もしかすれば、リジエは
自分を捨てた飼い主を

今でも探し求めているのではないだろうか、と。

もう一度 その人に
逢いたくてたまらないのではないだろうか、と。

そのことを考えると

ありすは寂しさと小さな嫉妬で
心が波のようにざわめき

あの日、ありすの髪を

引き千切るばかりに吹き荒れていた
冷たい冷たい風が

ありすの気持ちいを凍らせる。

ありすは海に嫉妬していた。

今なお、リジェの心を捉えて離さない

あの海 あの波 あの空 あの風。

ありすぶるーの空が何処までも広がっている。

ありすとリジェはこの町で

この空を飽きるほど仰ぎ

日々を過ごした。

時には、

同じ風に抱かれて 同じ花を愛で

同じ想いで 小さな胸を

いっぱい満たし

そして時には 別々の時間を過ごし

異なる雨の音に 心を震わせたりした。

そうして ありすとリジェが

初めてあの海で出逢ってから

いつしか 3年の月日が流れ

リジェは、美しい雌猫に成長し

ありすは、16歳になろうとしていた。

第5話

肩まで伸びた髪から滴がぽとぽと床に落ちた。

「もう、またありすね。いいかげんにしなさい。」

母親の不機嫌な声が洗面所から聴こえてくる。

部屋へと逃げたありすは

ドライヤーの設定を「強」へと変え

母親の声が聴こえないようにしてしまう。

白地にブルーの細かいドットがついた

ありすの部屋のカーテンを

初夏の風がふわりと持ち上げて

ありすの髪までやってきた。

薄く開けておいたドアを押しやるようにして

今、リジェが入ってきたのだ。

にやお・・ん。

相変わらず啼き方は、小さな頃そのままの
甘えたまんまのリジエだったが
すっかり大人になったリジエは
近所でもちよつと評判の美しい雌猫に成長していた。

界限のボス猫他、数匹の雄猫が
絶えずリジエの周りを、

いつもつきまとうようにして歩いていたが
リジエは全く意に介さずといった顔で

ミステイオフホワイトの毛と
ネイビーグリーン眸を

一番美しく見せることのできる姿態を
まるで心得てでもいるかのように
しなやかに振舞うリジエは

ありすが見えていても、
思わず ほお・・とため息を漏らしてしまうほど
官能的で艶かしく

まだキスはおろか、
彼氏の一人もできないありすにとっては
リジエはまさに羨望の的だった。

ありすは高校に入学し
毎日勢い良く自転車で坂道を下り
学校へと向かった。

ここ数年で一氣に増えた

この町の人口に應えるようにして
新しくできたばかりの高校に入学したありす。

高校は、

ありすの家とあの海の

ちょうど真ん中あたりにあり

授業中、窓を開けていると

風向きによっては

潮の香りがふいに鼻先をかすめることがあり

ありすはそんな時 必ず あの小さな傷を思い出し
胸の奥がきゅ・・と痛んだ。

映画に入ろうとありすを誘った友達を、
うまく説得して演劇部に入部したのも
映画の撮影場所にもしかすると、
あの海が選ばれるのではないかと
ありすが懸念したからであり

運動部を避けたのも

朝練や放課後などに、海へと走りこむ運動部の姿を
中学生のありすが、時々目に見ていたからであり、

あの海に結びつくかもしれないものたちを

できるだけ自分の周りから排除することによって

ありすは、自分とリジェの関係を

無意識に守ろうとしていたのかもしれない。

何のために？と 誰かがそれを ありすに問うことはなく
ありすも又、自分自身にそれを問うこともなく。

尤も、ひとつだけ、ありすの思惑が外れたことがある。

それは思ったよりも演劇部の練習はハードであり

発声の為の腹筋運動や柔軟、時には走りこみなど

運動部さながらの厳しいトレーニングが待っていたこと。

それでも、毎日は案外に愉しく忙しく過ぎていき
ありすが海に悩まされることは殆どなく

リジエもまた、
毎日をのんびり優雅に暮らしているようで

ありすはこんな高校生活を、とても気に入っていた。

「ありす、なにやってるの？遅れるわよ！」

階下から母親の声が聴こえる。

8時17分。

「あ、いけない！」

ありすは慌てて

机の上の携帯を掴むと、階段を下りた。

「リジエ、行ってくるね」

自転車に跨ると同時に、

ペダルを踏む足に力を込め、一気に加速する。

あの角の電信柱を越えれば、あとは学校まで
一切ペダルを漕ぐ必要はない。

放っておいても、坂道が

ありすを正門まで運んでくれる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7197b/>

ありすぶる一の空

2011年1月12日03時19分発行